

第 1 回 インクルーシブな遊具広場整備指針検討委員会 議事要旨

日時：令和 4 年 3 月 28 日（月曜） 17 時 00 分から 19 時 00 分まで

場所：エルガーラホール 7 階 会議室 1（福岡市中央区天神 1 丁目 4-2）

出席者：

上角 栄子	インクルーシブふくおか 代表
清水 邦之	NPO 法人福岡市障害者関係団体協議会 理事長
野口 信介	東福岡特別支援学校 校長
平井 康之	九州大学大学院芸術工学研究院デザインストラテジー部門 教授
道下 美里	三井住友海上火災保険株式会社 パラアスリート
堀内 規生	パラアスリート伴走者（道下委員補助）
高島 宗一郎	福岡市長

（以下、WEB 参加）

龍円 愛梨	東京都議会 議員
-------	----------

【事務局】

福岡市住宅都市局花とみどりのまち推進部みどり整備課

〈開会、注意事項説明等〉

〈市長挨拶、委員紹介〉

〈講演〉

〈資料確認、事務局紹介〉

〈委員長の選任〉

平井委員を推薦し、承認される。

〈副委員長の選任〉

上角委員を推薦し、承認される。

〈資料説明〉

スケジュール及び検討内容案について 資料2

意見なし

○委員長

第2回のヒアリング、ワークショップの結果報告が大事だと思っている。つまり、ヒアリングが、我々の活動の一番の宝物になると思う。それが、単に「こういうこと言っていましたよ」だけではなく、本当に思っていることは何なのか？というところまで深掘りをして、まとめていかないと、いいものできないと思う。それをインクルーシブ公園という考え方にフィードバックして、皆さんで整備指針ができたらいいい。

〈資料説明〉

資料3

- ① 福岡市のユニバーサルデザインの取り組み
- ② インクルーシブな遊び場づくりについて
- ③ 福岡市の公園の概要

○委員

ユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインとあるが、ユニバーサルデザインというのは、造形物とかそういったものの機能性をもとに考えたデザインというイメージがあって「誰でも使える」デザインという捉え、インクルーシブデザインになると、それをどう使うかとか、人と人をどう繋ごうとしているのかということまでも求められている気がするが、そういった捉えでよろしいか。

○委員長

誰もが利用できるというのはユニバーサルデザイン。最初はやはり、医学的障がいという体の障がいをバリアフリーで解決するということであったが、もう今では、障害者差別解消法等含め、社会的排除、社会的なバリアの排除に変わってきている。そういう意味で、単にアクセシビリティだけじゃないところに来ている。

インクルーシブが何でそこに入ってきているかということについては、「遊びが豊か」という時に、みんなが平等に「遊び豊か」ということもあるが、それだけではない。つまり、私はユニバーサルデザインというのは、インサイドアウトだと思っている。人口の分布があって、8割の人が真ん中にいて、左右の10%の人が除外され、サービスを受けられていない。じゃあそのメインストリームの人々のサービスをどうやって左右の10%に展開するか、というのは、インサイドからアウトサイド。より広い人が使えるという風になっていると思うが、私はインクルーシブは逆で、アウトサイドインだと思っている。つまり、みんなが同じサービスを受けるのではなくて、アウトサイドつまり、これまでエクスクルーデッド（排除）されてきた人の視点とか遊び方があるので、それを取り入れることで、みんなが「こんな新しい遊び方があるんだ」など、そこで新しいものが生み出される。つまり、インサイドアウトサイドのそのベクトルの方向性の違いは、結構大きいと思っていて、そこがこの「遊びが豊か」というところにうまく繋がれば、このインクルーシブ公園が面白くなると個人的に思っている。

〈資料説明〉

資料4

④ 舞鶴公園での実証実験の結果

⑤ 第2回実証実験について

○委員

昨年11月から実証実験をされたということだが、障がいのある方の利用、それから一般の方の利用とあったが、障がいのある方は、こういう方というのを限定して、どちらかにお願いをして、来てもらったのか。それとも、お知らせして、自由に来てもらったのか。

○事務局

実はこの実証実験が話題になり、ニュースにも取り上げられたため、多くの方は、ニュースを見て来られたようだった。インクルーシブというか、誰でも遊べるんだよ、障がいのある子も遊べるんだよというような発信を、テレビ局や新聞でしていただいて、それを見て「私たち遊べるんだな」ということで来られた。やはりそれだけ大きなニーズがあったという風に感じた。

○委員

体験された方の障がい別の割合はあるか。私は、肢体障がいであるが、やっぱり公園で遊ぶというのが、基本ない。よっぽどそういう風な、きちんと整備されてというか整った環境じゃないと、なかなかこう遊ぶというのができなくて。だから、車椅子の方が実際に来て、どういう風にこれ遊んだらいいのかなとか、よく説明聞かないと。利用しにくかったのではないかなと思うが、その辺はどうか。

○事務局

障がい別の利用者は把握していない。次の2回目の実証実験では、その点について、ぜひアンケートを取っていききたい。清水委員の言われる通り、どういった方々が、どういうニーズを持たれているのかを、もう少し細かに把握して、その人たち向けに、どういった使い方があるのかということを、我々が発信しなければいけないと思うので、参考にさせていただく。

○委員

広報で学校の方からチラシが配布されて、私の知り合いの車椅子の方にも行っていただき、私も

参加した。

そこで課題の一つだと思うのが、公園敷地のほとんどが砂地であったこと。車輪が砂に埋まるため車いすを自力で動かすことができないという感想があった。あと、大きい遊具のところで、スロープの部分は車いすで通れるが、その突き当りに大きな段差があって先に進めなかった。また、すべり台の滑り面が広がっていたが、これが、かえって不安定になっていて、しっかりしたものがあった方がいいんじゃないかという意見を聞いている。

他にも遊具だけでなく、遊具周りの環境が一番大事だと思う。バリアフリーのトイレだとかも常識的につけていただいて、遊具も使えないのもちょっとあったかなあというところで、次回の時に検討していただけたらと思う。

○委員長

先ほどの第2回実証実験の目的の説明で四つのポイントがあった。ワークショップ、ヒアリングと書いてあったが、内容がよくわからなかった。ヒアリングは何を目的に何をヒアリングするかというのと、ワークショップも言われる通り、何を目的にしていこうかというのは、しっかり整理した上で、実施する必要があると思う。

○事務局

ご意見いただければと思う。

○委員長

そういう意味では、我々委員がいろいろとお願いをすれば、まだまだそこはフレキシブルに動いていただけるのであれば、すごくいいと思う。

○委員

実証実験を次回される時の告知の方法について、視覚に障がいがあると情報障がいを伴い、なかなかテレビや広報誌で告知をされても、情報が手に入らない方がたくさんおられる。公園を利用される方は、障がいのあるお子さんがいらっしゃる方、逆に親御さんに障がいがあり、連れて行くことが難しい方、あとお孫さんを公園に連れていったりする方というように、色々な世代の方々が公園に関わるのかなと思うので、障がいがある方や幅広い世代の方たちに、情報が広がるように伝えていただければ嬉しい。

○事務局

非常に参考になる。広く情報が告知できるような方法はあるか。

○委員

視覚障がいに関しては、やはりコミュニティというか、私たちの大濠公園ブラインドランナーズクラブもそうだが、メールで発信したりしていることが多いと思う。メールで伝わったことを、それぞれが伝えていくというような形でちょっと時間がかかったりもするので、早めの告知がよい。実際、視覚障がい者の団体に活動されている人たちに情報を伝えれば、どんどん伝わっていくと思うので、お願いしたい。

○委員長

では全体を通して意見等あれば、お願いする。

先ほど、幅広くご意見いただきたいという内容が四つあって、まず「整備目標」、どこにどれだけ整備するか。次に、「整備内容」、どのような遊具や施設を整備すべきか。三つ目が、「周

辺施設」、トイレとか遊具以外に、周辺にどのような施設が必要か。最後に四つ目で、「運営方法」どのように維持管理、運営をしていくか、この四つが挙げられていたが、この四つに限らず、ぜひいろいろとご意見をいただきたい。

委員長として、ちょっとやり方を決めさせていただきたい。1人ずつ、今の四つのポイント、あるいはそれ以外のポイントでも結構なので、思いを皆さんに話していただいて、そこから、議論した方がいいかなと思う。

○委員

今の四つについて、自分の中でまだ整理は出来ていないが、先ほどお話のあった実証実験というのがすごく大事だと思っている。実証実験を行う上で、先に公園のイメージがないと実証実験にならないと思うので、インクルーシブ的な観点で見た時に、障がいのある子とない子が自由に遊び合ってる雰囲気をイメージする必要がある。小学校であれば特別支援学級のお子さんと通常の学級のお子さんが交流とか、共同学習とか行っている。そのため、この公園を、学校の授業で活用してもらうとよいかと思う。その中で、車椅子の動線を辿っていくとよいと思う。今回、私も実証実験を見に行ったが、結構坂が多かったり、公園まで行きづらく、公園の場所がわかりにくかったので、実際の動線をずっと辿っていく中で、子どもたちがどう感じたかというのはモニターできると思う。

それと、保護者に対しても、学校からお話をすると、協力してくださる方がたくさんいる。実証実験の場所の近隣学校と連携をとりながらワークショップ的に行うとよいと思う。ぜひ子どもたちを使いながら実証実験もしていただけたらよいと思う。

公園づくりをどのように進めるか、どのような遊具や施設を整備すべきかというのは、今回いろいろ出た。私も、先ほどお話があったように車椅子を砂場で動かすのはかなり厳しいと思っている。その障壁をどうクリアしていくのか、例えば車椅子のお子さんがそれを越えている様子を見ることで学ぶこともあるだろうし、障がいのある子とない子が互いに学び合える場があるのではないかと思う。

そのようなことを繰り返す中で先ほど委員長が言われたインクルーシブ的な公園としての価値がすごく上がると思う。最初作っていったって、実際に使う中で改善していったって、完成に近づいていくという、その営みも視野に置きながら、そうすると、公民館などで人の意見を聞いたりとか、より市民の方と連携しながら創るモデル公園みたいな感じでつくっていくのが大事だと思う。どのような遊具施設を整備すべきかというのは、今あるものを使いながら、今の課題点をどう改善していけばよいかという視点で、検討してみるというのもよいのではないかと思う。

周辺の施設については、今言った形で動線とか考えていくと、かなり整備しないとモデルにはなりづらいところがある。だから、公園だけを作ったから使えるかということそうじゃないのかなと思っている。維持管理や運営も含めながら検討していかないといけない。そう考えると、これはすごく大きなプロジェクトだなと思う。だけど視点としては、すごくいい。教育も福祉的な部分もすべて包含していく、福岡モデルとしても最高にいいなと思っているので、次回実証実験に向けて協力させていただければと思う。

○委員

私は車椅子で生活しているが、一番最初に考えたのは、先ほど委員の方からもお話あったが、公園で遊具を作って、それでこう満足なのかっていうところがあって、周りの環境が、そこを利用する人にとって利用しやすいのかどうかというのも、考え合わせないといけないと思う。

実際に、駐車場から段差があったりとか、坂があったりとか、そういう風になってくると私たちは、非常に行きづらい。行けば、その遊具は使えるだろうが、そこに行くまでのルートが、きちんと整備されないと、なかなか行こうかなっていう気にならない。そういうのがもう大前提。

それと、やはり障がい、いろいろな障がいの方がいる。すべての障がいに対応するとなると、かなり厳しいというか難しいところはある。実証実験をする中で、ある程度限定したところでの取り組みをまずやってみて、それから少しずつ幅を広げていくっていう形が、一番いいのかなと思う。先ほどもお話があったが、やはり車椅子だと、舗装とかそういうのがないと、移動しにくい。そういうところが整備されていると非常にありがたい。移動しやすいとか、そういうところをしっかりと頭に入れて、していただくと、非常に意味がある公園になると思う。

○委員

『インクルーシブ公園』という用語にちょっと違和感があって、そもそも公園はインクルーシブなものだろう？っていうところから。でも、公園の中で、いろんな子どもたちが楽しく遊べるようになるのはすごくいいことなので、このような公園ができることは、いろんな可能性を含んでいると思う。例えば、教育大学の学生さんとか、障がいのある子どもさんに、教育実習とかで、こういう場に来ていただいて、子どもたちと触れ合うとか、そういう勉強の場にもなると思う。

これは、インクルーシブになるような仕掛けの一つであるが、そういうのがあったり、遊びに行くにしても、すごく環境が大事で、障がいのあるお子さんは、本当に多様なお子さんがいる。遊具があっても遊べないお子さんもいると思う。そのお子さんたちが、公園になぜ遊びに行くのかとか、そういうことも考えながら、寝そべって風を感じるのも気持ちいい、それも公園に行きたい一つだとか。そういう遊び場だけではない他の面もちょっと考慮しながら、公園を作っていたきたいと思うし、色々な面で検討していただきたいと思う。本当に福岡市には可能性がある、福岡市は自信持っていていいと思う。本当にユニバーサルデザインがいろんなところでできていて、浸透していると思う。

○委員

まずは、どこにどのように、について。私は今、大濠公園、春日公園で練習をしているが、なぜここを利用しているかという、やはり先ほど委員が言われた動線、すごく駅からアクセスしやすい。公園まで1人で行けるというのが私にとって利便性が高いところ。やはりアクセスがすごく大事で、そこまで行けなければ何も始まらない。「また行きたい」と思うかというところで、人の手を借りずに行けるってこともすごく大事なかなと思う。

どのような遊具、について。私は、目が不自由なので遊具自体はあまり知らないので何とも言えないが、先ほどの事例で、カラーリング、コントラストをしっかりとつけて、路面の区別などは、弱視の人でも自分1人でできるというところが、とてもいいことだと思う。大濠公園も路面のコントラストがあるので、私たちも利用しやすい。

遊具以外に周辺にどのように、について。例えば、大濠公園に県外から来る方もいらっしゃる。公園を利用した後、食事や周辺の施設での楽しみがあり、そこで出会った仲間との親睦が図れるような立地が理想だと感じる。障がいがある人も利用する為、バリアフリーのトイレやスロープ等敷地の広さも必要になるが、同様に利便性も大事だと思います。

どのように維持管理運営していくか、について。視覚障がいがあるので、例えば、周りでプールの監視員のように利用者を見てくださる方がいるというのはとても重要だと思う。

コミュニケーションが取りにくい視覚障がい者と聴覚障がい者。点字ブロックがあると嬉しい視覚障がい者と、できればフラットな路面が好ましい車椅子ユーザー。異なるニーズにも対応できることが、みんなの公園に大事だと思います。また、多様なニーズに対応できる考え方や伝え方ができる管理者や地域ボランティア等の人材育成が大事だと感じます。共に学びあうワークショップ等を繰り返し、みんなでより良いものにしていけたら嬉しいです。

○委員長

いろんな意見が出て、大変よかった。最後に簡単なまとめをしたい。

委員の方からは、近隣の重要性。学校とかそういうところを巻き込んで一緒に作っていくと。福岡モデルという言い方が何かすごくいい。

それから、委員の方からは物理的な環境をどう整備していくか。ということがあった。それと、誰を対象にするか分かった上で、広げていく。だから、この人にはこう、がわかっていればよい。誰でも対象と聞いて、もし行ってがっかりすることがあったら逆効果だから、その理解をきちんと作っていく必要があると思う。

委員の方からは、インクルーシブ公園の違和感というのは、私もそう思う。やはり皆さんと一緒に、インクルーシブ公園の定義というか、福岡ではこう考えるというのを、一緒に考えていくのがいいと思っている。それにはおそらく、こういう場が社会の仕組みとして、どう、動いていくかとか、単に遊ぶだけではなくて、遊ばない公園、寝そべったり、そういうのも含めて多様性がある。

それから委員の方からは、1人で行ける、人の手を借りずにというところが大変印象に残った。誰かに助けてもらってという先入観があると思うが、実はそうじゃないところを強く考えていきたいと思う。食事とか、公園での行為の魅力も大きい。何が楽しみかは、人によってかなり違うと思うので、多様な楽しみ方がきちんと目的として入っている公園づくりがあったらいいなと思う。最初私は、街区公園がいいと思っていたが、人の関わりという意味でいくと、誰かがいるということになると、総合公園のような大きいところで、人と人の繋がりができる方にメリットがあるかなと感じた。監視員とかプレイリーダーなど、空間だけでなく人の仕組みも含めて、トータルに考えていかなければいけない。また多様な人々の間のバリアフリーコンフリクトをどう解消するかについて、私はジャーニーマップによって、その人の視点で、具体的にじゃあ駅からどう動くかをジャーニー（一連の体験）というが、それを全部マップにする。車椅子利用の人はどうか、視覚に障がいのある人はどうかという風に、マップで考えると、抜けてるところがよく見える。そういう形で、ぜひここでのノウハウを、ヒアリングをもとにして、まとめていけたらいい。

駆け足ですがまとめでした。どうも皆さん議論ありがとうございます。

ここで進行を事務局にお返しする。

○事務局

大変活発なご議論いただき本当に皆さんありがとうございました。

本日いただいた意見は、まず議事録に起こし、委員の皆様にご確認いただいて、ホームページ等で公表させていただきたい。

それでは次回の検討委員会の時期は8月頃を目途に、また詳細の日程や会場等は改めてご案内差し上げたい。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

〈閉会〉。